

前3千年紀末から前2千年紀初頭の北メソポタミア —テル・サラサート I 号丘第Ⅲ層出土土器の再検討—

木内 智康

The Late Third to the Early Second Millennium BC in North Mesopotamia :
A Reexamination of the Pottery from Telul eth-Thalathat I, Level III

Tomoyasu KIUCHI

本稿ではイラク北部、テルール・エッ・サラサート I 号丘（テル・サラサート I 号丘）第Ⅲ層出土の未公表土器を報告するとともに、その年代的な位置付けについて論じる。周辺の遺跡で報告されている断片的なデータとの比較によって、この土器群がアッカド期と前2千年紀初頭の2時期に位置付けられることを明らかにする。後者の土器はいわゆる最初期のハブール土器であり、前3千年紀と前2千年紀を繋ぐ資料として編年上重要な意味を持つ。最後に、本稿で提示する土器は編年を議論する上で重要なばかりでなく、前2千年紀の都市の復興を考える上でも意味を持っていることを指摘する。

キーワード：テル・サラサート I 号丘、北メソポタミア、ハブール土器 都市崩壊 都市復興

In this article, unpublished data on pottery from Telul eth-Thalathat I (Tell Thalathat I) is presented, from a chronological point of view. Comparisons with fragmentary data reported from other nearby sites enable us to divide the Thalathat I pottery into two categories, the pottery of the Akkadian period and that of the early second millennium BC. Of significance is the fact that the early second millennium ceramic material includes so-called “earliest Khabur Ware”, which is pottery considered important for examining a ceramic sequence between the third and the second millennium BC. Some of the Thalathat I pottery reported in this article is, therefore, useful not only for chronological discussions but also for researching north Mesopotamia from the viewpoint of the regeneration of cities during the early second millennium BC.

Key-words: Tell Thalathat I, north Mesopotamia, Khabur Ware, collapse of cities, regeneration of cities

はじめに

本稿ではテル・サラサート I 号丘（Tell Thalathat I）第Ⅲ層出土の未公表土器を報告するとともに、その位置付けについて論じる。筆者は現在サラサート I 号丘出土資料と図面類を整理している。その整理作業の中で従来前3千年紀とされていた第Ⅲ層出土土器が、実際にはアッカド期と前2千年紀初頭¹⁾の2時期に分類可能であることを認識するに至った（後述参照）。とりわけ、後者の時期を含む、前3千年紀末から前2千年紀初頭にかけての北メソポタミアの考古学的な様相には未だ不明な点が多い。近年イラク領内での発掘調査が停滞している一方でシリア領内での発掘は盛況である。本稿の対象範囲内ではハブール（Khabur）川流域での調査が進展し、報告も増えつつある。しかしながら、そこから得られる情報は断片的である。発掘調査が進展しつつも、関係するデータはあまり報告されていない。その背景には該期が都市崩壊の時期の前後に当

たり、多くの集落が放棄されているからだとする説もある。テル・レイラーン（Tell Leilan）での居住の断絶（Habur Hiatus I: Weiss et al. 1993）はよく知られるところである。この都市崩壊という現象は北メソポタミアに限ったことではない。レヴァントやエジプト、アナトリアなど広範囲におよんだことが知られており、その背景には気候変動があったとされる（Dalfes et al. 1997）。北メソポタミアについていえば、前2200年ごろの火山噴火を契機として起こった乾燥化が定住集落の放棄を促したというシナリオが提示されている（Courty and Weiss 1997）²⁾。その一方で、環境が悪化した背景には人為的な要素も大きいとする考え方（例えば Wilkinson 1997）もある。

居住の断絶が進むとはいえ、一部の都市は継続して維持されたとされている。北メソポタミアでは例えばテル・ブラク（Tell Brak）やテル・モザーン（Tell Mozan）などがこれにあたる。両遺跡はそれぞれ古代名がナガル

(Nagar)、ウルケシュ (Urkesch) とされる王国の中心であり文書資料によりその存在が知られている (Oates and Oates 2001: 392-394)。シリアのユーフラテス川中流域以西では具体的にその崩壊から復興にいたる過程が議論されている状況 (Cooper 2006; Nichols and Weber 2006) に対して、北メソポタミアではとりわけ前2千年紀の復興に関する議論が十分に行われるに至っていない。これはデータ不足が大きな要因であると考えられる。

本稿で報告する土器資料は上記のような研究の状況において、大きな意味を持っていると考えられる。まず何よりも、近年調査の途絶えたイラク側の資料を提示するという点。さらには、データの乏しい該期の資料を提示するという点で重要といえる。加えて、詳細は後述の議論に譲るが、サラサートI号丘で検出された土器資料は、土器編年を考える上で貴重な資料を内包していた。以下では、まず1) サラサートI号丘の紹介をした後、2) 出土土器資料に関する報告を行い、3) それらと周辺出土資料との比較を行ったうえで、4) その位置付けについて議論する。

1. テル・サラサートI号丘

テル・サラサートはイラク北部、現在のモースル市から西へ約60kmに位置する (図1)。テル・サラサートとはアラビア語で3つの丘を意味する。しかしこの名称は正確ではなく、実際には5つのテルからなる遺跡群である (図2)。I号丘はこの中で最高の高さ (周囲の平原との比高差約19mを測る) を誇り、ここに眠る遺構がどの時代のど

のような性格のものであったかは、調査開始時から関心がもたれていたという (松谷・深井 1978: 33-34)。テル・サラサートでは東京大学イラク・イラン調査団によって1956年以来これまで5次にわたる調査が行われてきており、II号丘とV号丘については既に詳細な報告書が刊行されている。I号丘は1965年と1976年に発掘調査が行われた。概報の形では報告されている (松谷・深井 1978; Fukai and Matsutani 1977) が、詳細な報告書は未刊行である。報告書が刊行されるに至らなかった最大の理由は発掘が未完のまま中断になってしまったためである。概報があるとはいえ、遺構図が示されていたのは第I層と第II層のみであり、本稿で扱う第III層についてはこれまで十分な報告がなされていなかった。ここで第III層ばかりでなく、その発掘に至る経緯を述べることは出土遺物の性格を示す上でも有用と考えられる。そこで以下、簡単にI号丘における発掘の経緯と遺構について上層から順に述べる (図3)。

1965年の調査において検出されたI号丘最上層 (第I層) の遺構は6部屋からなる建物であり、壁の厚さは最も薄い部分でも1mに達する。建物南面には石灰岩の平石による石敷きがなされていた。6部屋のうち5部屋の天井は日乾煉瓦による筒形天井 (ヴォールト) となっていた。各部屋の床面から天井までの高さはわずかに約1.2mであり、住居とは考えられない。そのため当初、これら各部屋は墓室であり、この建物は集団墓と考えられた。しかし各部屋からはほとんど何も検出されず、墓室という仮説は棄

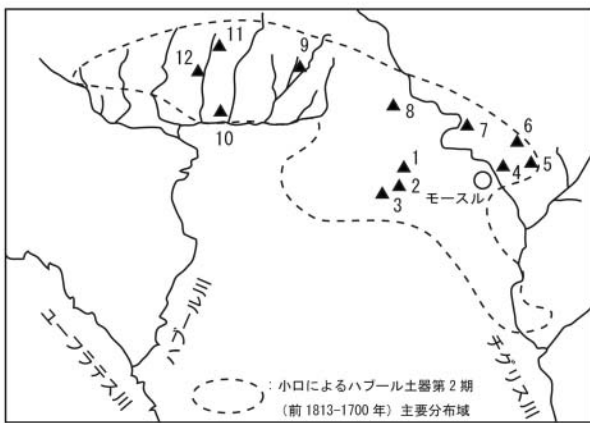


図1 関連する遺跡分布図 (Oguchi 2001: Fig. 7を改変)

(1: テル・サラサート、2: テル・タヤ、3: テル・アル・リマー、4: ニネヴェ、5: テル・ピツラ、6: テベ・ガウラ、7: テル・ジガーン、テル・フィスナ、8: テル・ハマド・アガ・アッ・サギール、9: テル・レイラーン、10: テル・ブラク、11: テル・モザーン、12: チャガル・バザル)

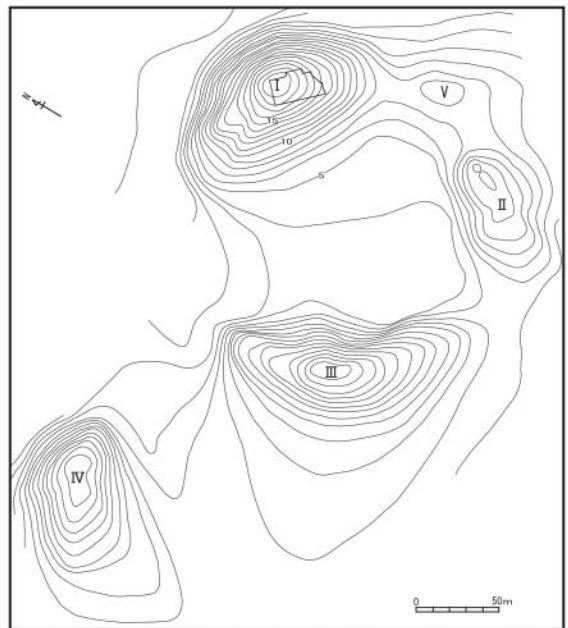


図2 テル・サラサート遺跡平面図 (Egami 1958: Fig. 1を改変)

表1 土器詳細リスト

No.	図	発掘区	出土	フィールド番号	色調	胎土	混和材	成形	調整	装飾	概報での番号
1	5	H-15	床面	R34	淡緑色	水鏡	細砂	ロクロ	ハラミガキ	刻文・刺突文	Fukai and Matsutani 1977: Fig. 6-2
2	5	H-15	床面	R35	淡緑色	水鏡	細砂	ロクロ	ハラミガキ?	刻文	Fukai and Matsutani 1977: Pl. 9-5; 松谷・深井 1978: 図版16-1
3	5	H-15	床面	R37	淡緑色	水鏡	細砂	ロクロ	ハラミガキ	刻文	Fukai and Matsutani 1977: Fig. 6-5; 松谷・深井 1978: 図版16-5
4	5	H-15	床面	R38	淡緑色	水鏡	細砂	ロクロ		刻文	
5	5	H-15	床面	R39	淡緑色	水鏡	細砂	ロクロ	底部ハラミガキ??	刻文	
6	5	H-15	床面	R41	暗緑色	水鏡	細砂	ロクロ	ハラケズリ	刻文	
7	5	H-15	床面	R43	淡緑色	水鏡	細砂	ロクロ	スリップ	刻文	
8	5	H-15	床面	R64	淡緑色	水鏡	細砂	ロクロ	スリップ・ハラミガキ	刻文	
9	5	H-15	床面	R48	淡緑色	水鏡	細砂	ロクロ	スリップ・ハラケズリ	刻文	
10	5	H-15	床面	R47	褐色	粗	細かいササ	輪積み			
11	6	H-15	覆土	136	暗褐色	粗・暗褐色	多量の砂	輪積み			
12	6	H-15	覆土	157	淡緑色	水鏡	細砂	ロクロ			
13	6	H-15	覆土	118	灰色	水鏡	細砂	ロクロ			
14	6	H-15	覆土	120	淡黄色	水鏡	細砂	ロクロ			
15	6	H-15	覆土	120	淡黄色	水鏡	細砂	ロクロ			
16	6	H-15	覆土	142	淡黄色	水鏡	細砂	ロクロ			
17	6	H-15	覆土	151	淡黄色	水鏡	細砂	ロクロ			
18	6	H-15	覆土	136	淡緑色	水鏡	細砂	ロクロ			
19	6	H-15	覆土	136	淡緑色	水鏡	細砂	ロクロ			
20	6	H-15	覆土	134	淡緑色	水鏡	細砂	ロクロ			
21	6	H-15	覆土	112	淡緑色	水鏡	細砂	ロクロ			
22	6	H-15	覆土	120	淡緑色	水鏡	細砂	ロクロ			
23	6	H-15	覆土	157	灰色	水鏡	細砂	ロクロ	ハラケズリ?	刻文	
24	6	H-15	覆土	136	淡緑色	水鏡	細砂	ロクロ			
25	6	H-15	覆土	151	淡緑色	水鏡	細砂	ロクロ	スリップ・ハラケズリ	刻文	
26	6	H-15	覆土	148	淡緑色	水鏡	細砂	ロクロ	スリップ・ハラケズリ	刻文	
27	6	H-15	覆土	134	淡緑色	水鏡	細砂	輪積み			
28	6	H-15	覆土	155	淡黄色	赤褐色	スサ	輪積み			
29	6	H-15	覆土	136+161	褐色	淡褐色	スサ	輪積み			
30	7	G-13	覆土	227	淡緑色	明褐色	スサ	ロクロ	ハラケズリ	刻文	
31	7	G-13	覆土	231	淡黄色	水鏡	細砂	ロクロ	ハラケ		
32	7	G-13	覆土	231	淡黄色	水鏡	細砂	ロクロ	ハラケズリ (外面)		
33	7	G-13	覆土	227	淡緑色	水鏡・淡黄色	細砂	ロクロ	スリップ・ハラケズリ		
34	7	G-13	覆土	223	淡黄色	水鏡・淡緑色	細砂	ロクロ	スリップ・ミガキ?		
35	7	G-13	覆土	231	褐色	淡紅色	スサ	輪積み	スリップ	刺突文	
36	7	G-13	覆土	223	褐色	褐色	スサ・レキ	輪積み	スリップ		
37	7	G-13	覆土	231	褐色	淡黄色	スサ・小レキ	輪積み	スリップ		
38	7	G-13	覆土	231	淡黄色	水鏡	細砂	ロクロ	ハラケズリ		
39	7	G-13	覆土	223	クリーム	赤褐色	スサ	ロクロ	ハラケズリ (外面)・ハラ		
40	7	G-13	覆土	223	淡黄色	明褐色	スサ	ロクロ	スリップ (内外面)・ハラ		
41	8	H-13	覆土	235	淡黄色	水鏡・淡黄色	細砂	ロクロ	スリップ		
42	8	H-13	覆土	226	褐色	水鏡	細砂	ロクロ	スリップ		
43	8	H-13	覆土	211	暗灰色	水鏡・暗灰色	細砂	ロクロ	スリップ		
44	8	H-13	覆土	217	黒/赤褐色	明褐色	細砂	ロクロ	磨研 (内外面)		
45	8	H-13	覆土	225	明褐色	明褐色	細砂	輪積み	赤色スリップ・ハラミガキ		
46	8	H-13	覆土	211	褐色	水鏡・褐色	スサ	輪積み	スリップ		
47	8	H-13	覆土	235	淡黄色	淡緑色	スサ	輪積み	スリップ	彩文 (赤褐色)	
48	8	H-13	覆土	226	クリーム	明褐色	スサ	輪積み	スリップ (内外面)	彩文 (暗褐色)	
49	8	H-13	覆土	226	明褐色	明褐色	スサ	輪積み	スリップ (内外面)	彩文 (褐色)	
50	8	H-13	覆土	226	明褐色	明褐色	スサ	輪積み	スリップ	刻文・彩文 (濃赤褐色)	
51	8	H-13	覆土	217	赤褐色	赤褐色	スサ	輪積み	スリップ	彩文 (濃赤褐色)	
52	8	H-13	覆土	211	淡緑色	明褐色	スサ	輪積み	スリップ (内外面)	彩文 (黒色)	
53	8	H-13	覆土	226	明褐色	明褐色	スサ	輪積み	スリップ	彩文	
54	8	H-13	覆土	226	クリーム	赤褐色	スサ	輪積み	スリップ (内外面)	彩文 (明褐色)	
55	8	H-13	覆土	211	クリーム	明褐色	スサ	輪積み	スリップ (内外面)	彩文 (褐色)	

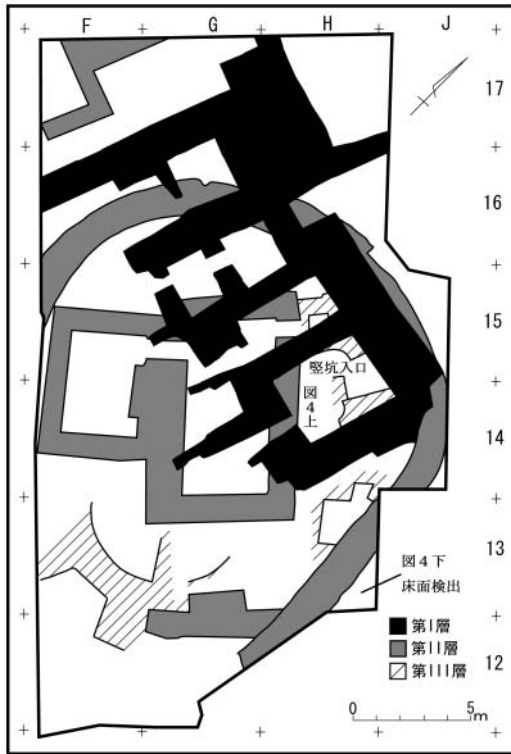


図3 遺構図



図4 遺構写真 (東京大学総合研究博物館所蔵)
上: H15区床面出土状況
下: H13区土器敷の床面検出状況

却された。その後、天井の無かった1部屋 (RM-4) から堅坑が検出された。その堅坑を掘り下げると、水平方向に続く通路が現れた。1965年の調査ではここまでで調査が終了している。これにより、第I層の遺構は2階建ての建物ないし地下遺構を持つ建造物のいずれかであろうという予測が立てられた。

続く1976年の調査では第I層の遺構の性格を明らかにすることと、この遺構の下の層位の文化を調べることを目的に発掘が継続された。堅坑とそれに関連する遺構は、筒形天井を持つ部屋からなる建物と同時期の遺構と考えられたため、発掘は建物を解体しないまま掘り下げるという手法が取られた。まず明らかとなったのは、1965年の調査にて検出されていた水平方向の通路は行き止まりであるということであった。その後これまでの堅坑 (第一堅坑) の底からさらに下方へ続く堅坑 (第二堅坑) が検出された。第二堅坑の底から水平方向に二方向の通路があったが行き止まりであった。そして第二堅坑の底からさらに第三の堅坑が下方に続いていた。しかし狭い空間でこれ以上掘り下げることが危険であるという判断から、この遺構の掘り下

げは上部の建物の解体後に持ち越されることになった。この1976年の調査により、地下遺構を持つ建造物であることが確実になった。加えて、行き止まりになっている通路の存在が、盗掘を避けるための偽の通路と考えられることからこの遺構は墓 (松谷・深井 1978: 46)、「まいり墓」ないし「にせ墓」 (東京大学イラン・イラク学術調査室 1980: 10-11) であったと想定されている。

さて、堅坑の掘削に併行して第II層、第III層の発掘も行われた。上述のように、第I層の建物の壁を残したまま掘り下げているため、遺構は断片的にしか検出されていない。第II層からは楕円形の周壁と少なくとも2部屋からなる建物が検出されている。周壁の短径は16mを測る。南側の壁大部分が風化によって失われているため、長径は不明である。また、発掘区西部では暫定的にA層とされている建物が存在している。遺物からはII層と考えられるが、層位学的証拠が欠けるため上記のような位置付けがなされている (松谷・深井 1978: 48-49)。ただし、本稿では第III層の発掘が断片的であることを示すことが目的であるので、ここでは第II層に含めて表示している。

その下の第Ⅲ層と考えられる壁は検出された部分がさらに少ない。それらの壁はH-15区、G-13区、H-13区、F-12区など発掘区の限られた場所において見られる。このように第Ⅲ層についてはとりわけ発掘面積が少なく、建物のプランを復元することは不可能であるのだが、部分的には床面まで到達している（図4）。また、厳密に言えば各区で検出された壁は上記のような発掘状況のために連続しているか否か判断できず、これらが同時期の建物の壁であることは保障されていない。この点については後述する。

概報ではこれら第Ⅰ層から第Ⅲ層までの年代については、近隣の遺跡との比較からある程度の幅を持たせて推定されている（松谷・深井1978: 58; Fukai and Matsutani 1977: 63）。まず、第Ⅰ層については保留とされている。上述の地下遺構を伴う建物が墓であるとすれば、主体部が未発掘ということになるので今後の調査を待つということであった。ただし、次に述べる第Ⅱ層の年代とはそれほどへだたっていないという想定がなされている。第Ⅱ層についてはテル・タヤ（Tell Taya）Ⅲ-Ⅵ層（前19世紀後半から前18世紀前半）に比定された。また、第Ⅲ層についてはテル・タヤⅥ-Ⅸ層（前3千年紀後半）とテル・アル・リマー（Tell al-Rimah）AS地区2期³⁾（同じく前3千年紀後半）に比定された。第Ⅲ層の発掘が部分的であったため幅を持たせたということであったが、テル・タヤについては特にⅧ層との併行関係が認められるとの見解も付されている。

3. 第Ⅲ層出土土器

(1) 土器分析について

ここで報告する土器は4つのコンテキストに由来する。第1はH-15区の床面出土遺物である。概報で報告された土器の多くはこの発掘区から検出されたものである。第2は同じくH-15区の覆土に由来する土器である。そして第3はG-13区出土、そして第4がH-13区から出土した土器である。これら第3、第4のコンテキストから出土した土器も覆土から出土したと記録されている。以下、この順で土器の報告を行う。上述したように、検出された壁の同時性は発掘では確認されていない。詳細は議論に譲るとして、以下では各コンテキストごとに器形別に土器を見ていくことにする。

なお、以下で提示する資料はいずれも東京大学総合研究博物館に所蔵されている図面から作成したものである。テル・サラサートⅠ号丘第Ⅲ層に関して実測と拓本の記録が採られ保管されている図面は計123点である。このうち、56点（うち2点は同一個体）をここでは提示する。

器形

以下の議論での混乱を避けるために、ここでは本稿で扱う器形について述べておく。

・壺

壺は胴部に比べて強く窄まった頸部を持つ器形を指す。頸部の長短により長頸壺、短頸壺とを区別する。

・甕

胴部から口縁部にかけて明瞭な頸部を呈することなく立ち上がり、開いた口縁部を持つ深い器形を指す。

・鉢

開いた口縁部を持つ浅い器形を指す。器高が最大径のおよそ1/3以下のものは浅鉢とする。本稿では口縁部を内側に折り返す浅鉢を内折口縁浅鉢、胴部に屈曲部を持つ鉢を屈曲浅鉢、とする。

・碗

胴部上半から口縁部にかけて閉じた器形を持つ。多くは半球状を呈する。折返し口縁を持つものを折返し口縁碗とする。また、これとは別に口縁部が玉縁状を呈する碗も存在し、これを玉縁状口縁碗とする。

・ピーカー

底部から口縁部までまっすぐに開いた器形を持つ。口縁はおよそ10cm、器高は12cmから15cmの範囲にほぼ収まる。

ハブール土器

本稿ではハブール土器の存在が重要な位置を占めるので、ここで簡潔に述べておく。ハブール土器とは、前2千年紀の北メソポタミアで用いられた、単色彩文土器である。チャガル・バザル（Chagar Bazar）を発掘したマロワン（Mallowan）によって命名された（Mallowan 1937: 102）。その主要な分布域は現シリアのハブール平原から現イラクのシンジャール平原にわたる（図1参照）。また、その存続期間についてはおよそ前19世紀から前14世紀ごろまでに及ぶ（Postgate et al. 1997: 53-54）。彩文には水平帯状文や三角斜格子文のような幾何学文様のほか、鳥をモチーフにした文様も見られる。器形については大型の壺、甕、鉢などから小型の碗まで多岐にわたる。粗製土器、精製土器ともに存在し、混和材に関してはスサ混和土器や砂粒混和土器が存在する。

以上のように、ハブール土器の器形、胎土、彩文は多様であり、単色彩文土器であること以上の定義は不可能である。そのためハブール土器であると認定するには、その時代と地域のコンテキストが非常に重要となる。従って、出土コンテキストが良好ではない場合には、その認定に多くの問題が生じることになる。本稿で論じる最初期のハブール土器⁴⁾の認定に関しては、筆者は1) 水平帯状文（彩文）の存在、2) 前3千年紀の器形と彩文との組合せ、3) 水平

带状文(彩文)と櫛描文の併用、4) 暗赤色系の彩文、の4点を特に重視する。最初期のハブル土器については本稿の後半で詳しく論じる。

(2) 各発掘区出土土器

H-15 区床面出土土器 (図5)

この発掘区から出土した土器はほぼ概報で報告された土器と同じである。ここで検出された器形の種類は多くない。出土したのは、ビーカー [1-3] (以下、[] 内の数字は図中土器の番号を指す)、折返し口縁壺 [4-6]、長頸壺 [7-9]、短頸壺 [10] である。

短頸壺 [10] を除き、ほかはいずれもロクロにより成形されている。例外であるこの壺は輪積みによって成形され、器壁は磨研されている。胎土には礫や砂を多く含むもので典型的な調理用土器と考えられる。実際、外面は炭化物が多く付着していた。

ビーカー [1-3] はこのコンテキストでは非常に典型的な土器といえる。ここに提示した以外にも完形、破片を含めさらに多くの類例が検出されている。内外面にロクロ目が明瞭に見られるほか、底部には糸切の痕跡が認められる。加えて、外面は縦方向に磨研されている。

検出された折返し口縁壺は2種に分類可能であるが、い

ずれも肩の部分に一条の刻文を持つ。2種のうちの第1は平底で胴部が半球状を呈するの小型の壺で、肩から頸部にかけて綾杉文などの刺突文が見られる場合もある [4-5]。第2は肩の張り出した小型で丸底の壺で、1点のみが検出された。これは焼きの良い緻密な胎土を持った灰色土器である [6]。

長頸壺も折返し口縁壺と同様に肩に一条から数条の刻文を持つことがある。内面は多くの場合、ロクロ目が強く残っている [7-9]。

H-15 区覆土出土土器 (図6)

覆土であるので、当然異なる時代の遺物を含んでおり、中には銅石器時代にまで遡ると考えられる土器片も記録されていた。しかし、大部分は床面出土遺物との類似を示す、広い意味で同時代といえる土器であった。ここではそれら同時代と考えられる土器を提示する。器形は床面検出遺物と比べ多様であり、ビーカー [18]、壺 [19-24]、甕 [28-29] や鉢 [11-17] も出土している。

鉢は大きく2種の器形に分類することができる。胴部に強い屈曲部を持つ屈曲浅鉢 [14・15] と屈曲を持たずまっすぐに広がる単純口縁の浅鉢 [11-13・16] である。また、口縁部に張り出しを持つ鉢 [17] も存在し、これは口縁部下外面に櫛状工具によると考えられる刻文を持つ。これらの鉢は1点 [11] を除き、ロクロによって成形されている。

ビーカー [18] は床面出土資料と全く同じ特徴を持つ。完形⁵⁾のほか、破片も多数検出されている。

壺には床面出土資料に比べて、若干の多様性が認められる。器形としては、床面出土土器と同様の折返し口縁壺 [19・21・22・24] のほか、これらに比べてやや縦長の器形を持つ折返し口縁壺 [20]、玉縁状口縁壺 [23] がある。これらはいずれも肩の部分に一条ないし数条の刻文を持っている点では共通する。また、綾杉文などの刻文や刺突文を持つ [21・22] 点も床面出土資料と共通する特徴といえよう。その一方で、これらの資料が床面出土資料と異なる顕著な点として、彩文を持つ土器が2点含まれていることが挙げられる。1点は口縁部直下に黒色の点列文を [19]、もう1点は肩から胴部にかけて少なくとも二条の平行する赤褐色の带状文と刻文を持っている [20]。水平带状文の施文を重視し、筆者はこれをハブル土器と考える(後述参照)。

比較的大型の短頸壺 [25-27] や甕 [28-29] はいずれもスサが混和されている、比較的大型の土器である。器壁には強いヘラケズリの痕跡をとどめるものもある [25・26]。また、装飾としては櫛描文や刻文が認められる [25・29]。

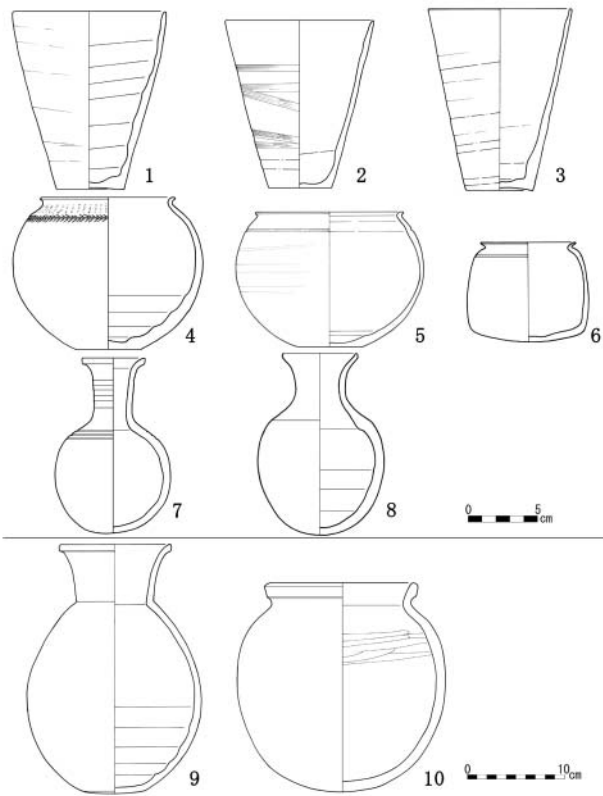


図5 H15 区床面出土土器

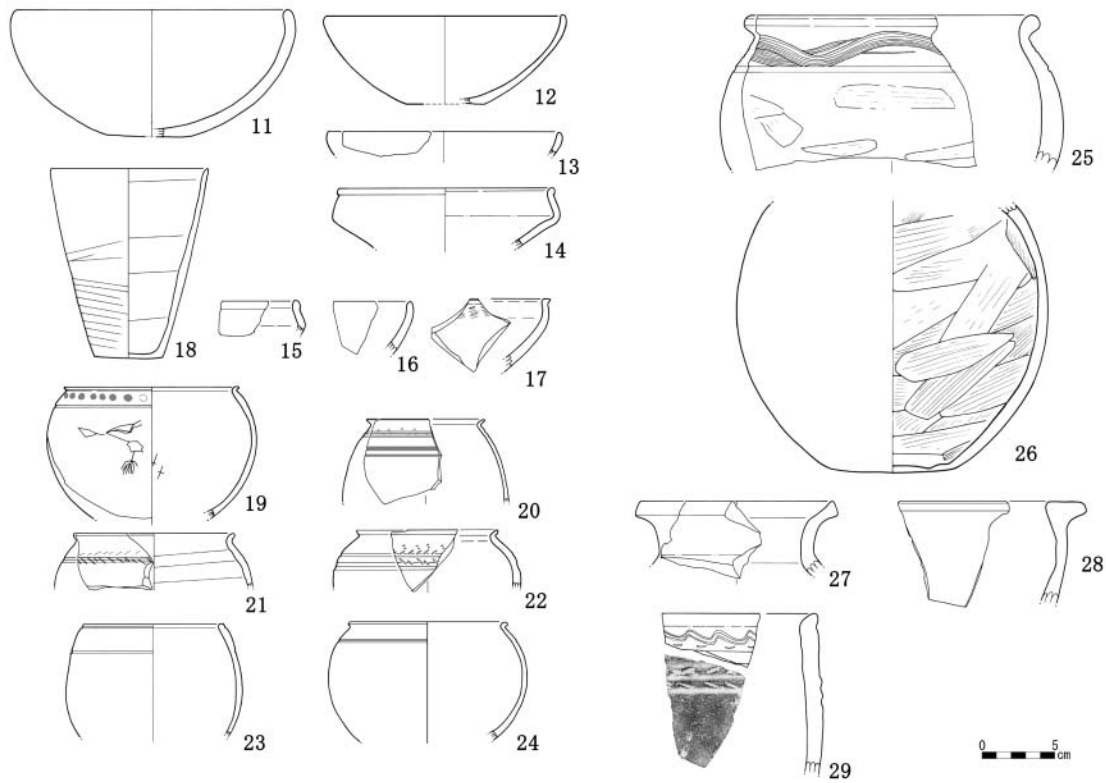


図6 H15区覆土出土土器

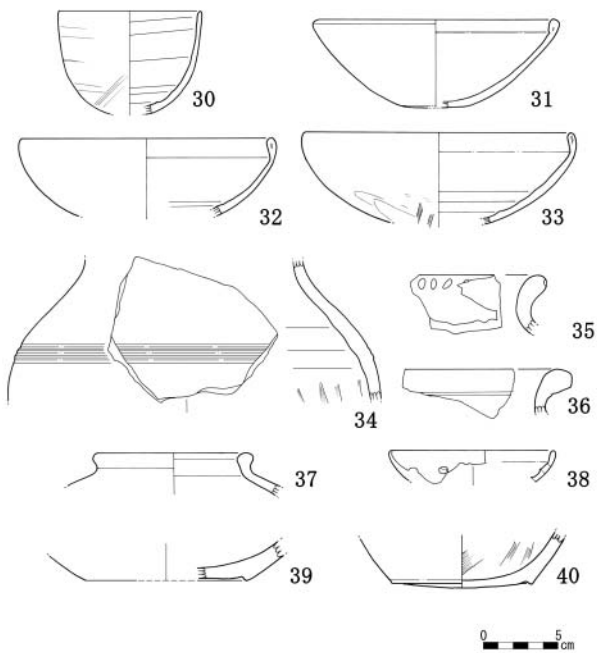


図7 G-13区覆土出土土器

G-13区覆土出土土器（図7）

上述のように、覆土に由来するとされる。これらの土器が壁の内側から出土したのか、外側から出土したのかといった詳細なコンテキストは不明である。H-15区とは土器の様相を異にする。器形としては、鉢〔30-33〕、大小の短頸壺〔34-37〕が出土している。そのほか、1点、漉器〔38〕や底部片〔39・40〕も出土している。

鉢は器高と直径との比率から2種に分けることができる。1つ目は丸底で胴部から口縁部にかけてほぼ垂直に立ち上がる単純口縁の鉢である〔30〕。2つ目は口縁部を内側に折返している内折口縁鉢である〔31-33〕。折返した口縁の内部は中空になっていることが多いようである。外面底部はヘラケズリの痕跡を残す例もある〔33〕。

壺の口縁部片の中には、口縁部直下に一条の刻文を持つもの〔36〕や口縁部に刺突文を持つもの〔35〕もある。なお、後者は表面が磨かれ、礫や砂が混和される調理用土器と考えられる。また、肩の部分に数条の刻文が周ることもある〔34〕。

その他、この発掘区からは底部片がいくつか記録されている。それらに特徴的なのは、いわゆる「浅い糸底」⁶⁾の存在〔39, 40〕である。

H-13区覆土出土土器(図8)

上述のように、この発掘区から出土した土器についても詳細な出土コンテクストは不明である。この発掘区では一部で床面に到達しているが(図4)、床面出土とされる土器片は記録されておらず、ここに挙げている土器はいずれも覆土に由来する⁷⁾。また、H-15区とは土器の様相を異にする点も指摘できる。器形としては、碗〔41・47〕、大小の壺〔42・43・45〕や甕〔44・48・49・51-55〕など挙げられる。

底部が丸底の碗〔41〕が存在するが口縁部が欠損している。全体的に丸みを帯びた器形から判断するとH-15区で特徴的に見られた折返し口縁碗よりも玉縁状口縁碗〔23〕に類似している。口縁部に折返しを持つ碗も存在する〔47〕が、胴部に屈曲をもち、これまでに見られた折返し口縁碗とは異なる。なお、この土器は斜格子三角文と水平帯状文というハブール土器によく見られる彩文が施されている。彩文についてはまとめて後述する。

壺については、いくつか特徴的な器形が見られる。〔43〕の土器はおそらく壺の頸部より上の部分にあたる。類例がテル・ブラクに存在する(後述参照)。2本が1組となっ

た低い突帯が少なくとも3組平行して走っている。また、口唇部に突帯を持つ大型の甕〔49・51〕も検出されている。これらはいずれも彩文を持つ。その他、器形ではなく、特徴的な胎土を持つものとして、礫や砂を混和し、磨研された調理用土器〔44〕が挙げられる。

最後に装飾について述べておく。ここで確認できたのは彩文〔47-55〕、刻文・櫛描文〔50〕、である。彩文の多くは水平帯状文であり、これらはハブール土器によく見られる彩文である。これらはサラサートI号丘第Ⅲ層の年代的な位置付けを考える上で重要な資料と筆者は考える。とりわけ重要なのは櫛描文と彩文の両方を持つ土器片〔50〕の存在である。詳細な議論は後に譲るとして、ここでは彩文の色調を述べるにとどめておく。色調は褐色〔49・55〕や明褐色〔54〕といった比較的明るい色彩の彩文のほか、赤褐色〔47〕、濃赤褐色〔50・51〕、暗褐色〔48〕、黒色〔52〕といった暗色系も彩文も見られる⁸⁾。

3. 他遺跡との比較

ここではテル・サラサートI号丘第Ⅲ層の位置付けを考える上で参考となる、前3千年紀後半から前2千年紀初頭にかけての報告のある周辺諸遺跡との比較を行う。比較するのは主として器形および装飾である。なお、器形に関する呼称は報告により様々であるが、以下の記述では上記サラサートの用語を踏襲している。関連する遺跡の層位については図9にまとめたので、適宜参照いただきたい。

(1) テル・タヤ (Tell Taya)

上述したように、概報時に出土土器に関して最も近い併行関係が認められたのがテル・タヤであった。以来30年が経過したものの、こちらの遺跡も最終報告書は刊行されておらず、参考にできる資料は30年前と変わらない。しかし、ここで改めてその併行関係をもう少し詳しく確認しておきたい。なお、以下で特にサラサートと関係すると考えられるⅧ層からⅦ層の年代についてはアッカド期、Ⅵ層については南メソポタミアのウル第三王朝期にあたとされている(Reade 1982: 74)⁹⁾。タヤⅧ層出土遺物として図示されている中でサラサートとの併行関係が認められるのは、ビーカー(Reade 1968: Pl. LXXXIV-8)、サラサートのH-15区で顕著に見られた折返し口縁碗(Reade 1968: Pl. LXXXIV-12・13)、内折口縁浅鉢(Reade 1968: Pl. LXXXIV-10)、屈曲浅鉢(Reade 1973: Pl. LXXV-d: Centre)である。報告によれば、ビーカーや口縁内折浅鉢はⅧ層ばかりでなくⅦ層でも出土する(Reade 1968: 252)。その一方で折返し口縁碗はⅧ層になると製作されなくなった可能性が示唆されている。続くⅦ層出土遺物として図示されている中には漉器(Reade 1968: Pl. LXXXV-16)や櫛

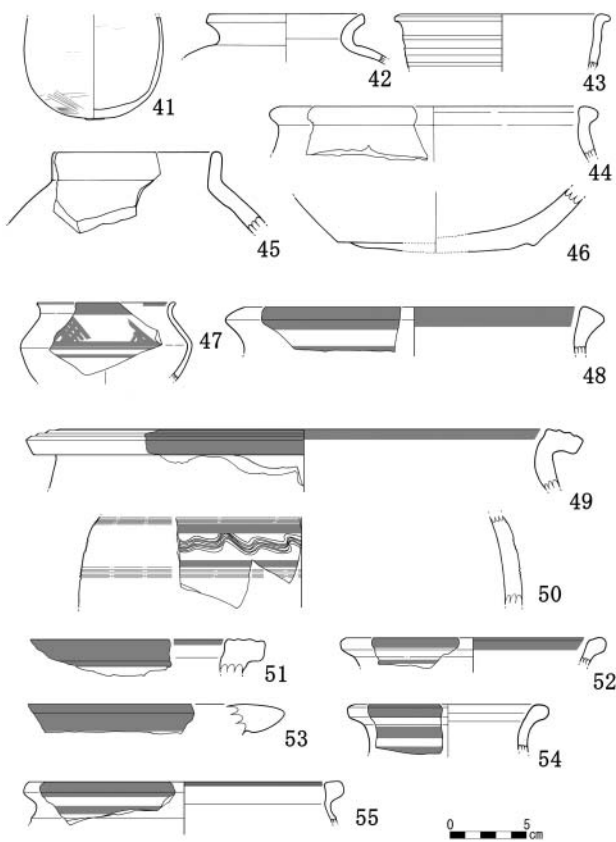


図8 H-13区覆土出土土器

BC	Thalathat I	Taya	Rimah	Nineveh KG区	Billa	Gawra	Jigan A C	Fisna	Hamad 西 北	Leilan	Brak	Mozan Pfälzner AA	Chagar Bazar	時代
1800	↑ Ⅲ層新 ↓	IV ↓? V ↓?	A4	V	4	V	3a 3b	IV ↑ ???	1 ↑? 2 ↑? 11	I Habur Hiatus 1	P	C4 7	D区	
1900												C5 8		
2000		VI									N	C6 9	II a	ポ ス ト
2100		VII	A5	VI VI A					3			C7 10 11	II b	ツ カ ド
2200												C8 12 C9 13 C10 14 C11 15 16		ア ッ カ ド
2350	↑ Ⅲ層古 ↓	VIII	A3	VII	5	VI	IV b	↑ Va	15	II b	M	C12 17 C13 18 19		ア ッ カ ド

図9 遺跡層位関係

以下の文献を参照して作成: Buccellati and Kelly-Buccellati 2001: Abb. 2; McMahon 1998; Oates et al. 2001: Table 1; Oguchi 2003; Pfälzner and Dohmann- Pfälzner 2002: Abb. 3; Porada et al. 1994: Fig. 4; Postgate et al. 1997: 44; Reade 1968; Spanos 1990: Tabelle I; Speiser 1933, 1935; Tunca et al. (eds.) 2007; Weiss et al. 1993; 井・川又 1984-1985; 沼本 1988。

描文を持つ大型土器 (Reade 1968: Pl. LXXXV-20) が存在するが、Ⅷ層ほどの併行関係は認められない。なおⅥ層については報告点数が少なく、サラサートに類似した土器を見出すことはできない。

ハブール土器が現れるのはⅣ層からである。報告されている図で注目されるのは、口縁部に突帯を持つ大型土器 (Reade 1968: Pl. LXXXVII-28)、「浅い糸底」 (Reade 1968: Pl. LXXXVII-27 ~ 30) などである。前者はサラサート出土例〔49〕の分類である。後者はⅣ層になって初めて現れる (Reade 1968: 258)。第Ⅳ層については前19世紀後半とされている (Reade 1973: 172-3)。

続くⅢ層出土土器はⅣ層の土器とほぼ差異は見出せないということである。年代に関しては、第Ⅲ層からはシャムシ・アダド治世と考えられる粘土板が出土しており、前1780年ごろと推定されている。

なお、第Ⅳ層では刻文と彩文の両方を併せ持つ土器と、第Ⅲ層では見られなくなる器形の土器が出土したと報告されているが (Reade 1982: 74)、実際の図は提示されておらず、詳細は不明である。

(2) テル・アル・リマー (Tell al-Rimah)

上述のようにサラサート I 号丘の概報ではタヤとともに

に、リマー AS 地区 2 期 (およそ前3千年紀末: 図9及び註4) を参照のこと) がサラサート I 号丘第Ⅲ層併行とされている。併行関係にあるとされたのは縞描文や綾杉文などの刻文であった (Oates 1970: Pl. X-a, b, c)。リマーの土器に関しては報告書が刊行されているのだが、前3千年紀末から前2千年紀初頭の土器の報告点数は少なく、刻文や縞描文以外に併行関係を見出すことは難しい。屈曲浅鉢に類似した胴部に強い屈曲を持つ鉢の報告はあるものの (例えば Postgate et al. 1997: Pl. 38-176, Pl. 61-568・569 など)、いずれも中期アッシリア時代にまで下るものであり、併行する事例と見なすことは困難である。

その一方で、ハブール土器の出現に関しては示唆に富む指摘がなされている。最初期のハブール土器は刻文・縞描文と彩文の組合せの装飾を持ち、彩文の色調は暗赤褐色から暗赤色であるという (Postgate et al. 1997: 53)。これらにはサラサート I 号丘の H-13 区から出土したハブール土器の一部と酷似していることを指摘できる (上記サラサート土器の記述及び後述の議論を参照)。

(3) ニネヴェ (Nineveh)

ニネヴェは1930年代初頭にトンプソンとマロワンによって発掘された (Thompson and Mallowan 1933) 後、

1989年と90年に再発掘がなされている (McMahon 1998)。このKG地区での発掘ではⅦ層からⅥ層にかけてサラサートI号丘第Ⅲ層の土器の類例を見出すことができる。出土土器については前者はアッカド期、後者はアッカド後期からウル第三王朝期に位置づけられている。器形としては、丸底の壺 (McMahon 1998: Fig. 5-3)、屈曲浅鉢 (McMahon 1998: Fig. 5-11) がⅦ層から出土している。また、サラサートH-15区でよく見られた折返し口縁壺〔4・5など〕の類例がⅥ層から出土している (McMahon 1998: Fig. 8-13 ~ 18)。特に1点 (McMahon 1998: Fig. 8-13) はH-15で彩文と刻文が施された折返し口縁壺〔20〕に類似した器形を持っている点が注目される。装飾に関しては櫛描文や刻文、刺突文が広く見られるほかは特に言及すべき特徴は見られない。

(4) テペ・ガウラ (Tepe Gawra)

テペ・ガウラではサラサートI号丘第Ⅲ層の土器の類例を第Ⅶ層に見出すことができる。第Ⅶ層は初期王朝期末からアッカド期に比定されている (Speiser 1935: 179)。まず、サラサートH-15区に特徴的であった折返し口縁壺 (Speiser 1935: Pl. LXVII-106 ~ 113) や肩部に刻文を持つ長頸壺 (Speiser 1935: Pl. LXIX-131 ~ 134・136) が報告されている。また、サラサート出土例〔19〕とは器形は異なるが、頸部に同様の点列文の彩文を持つ壺 (Speiser 1935: Pl. LXVIII-118) も存在している。

(5) テル・ピッラ (Tell Billa)

テル・ピッラでは第5層にサラサートH-15区に非常に類似した土器が認められる。この層位はガウラ第Ⅶ層と同時期 (つまり初期王朝期からアッカド期) であると報告されている (Speiser 1933: 268)。ここからはピーカー (Speiser 1933: Pl. LIV-4) と折返し口縁壺 (Speiser 1933: Pl. LIV-8) が報告されている。後者は図面から判断すると刻文と刺突文を持ち、底部に高台を持っている点を除けば、サラサートのH-15区床面出土土器〔4〕に極めて類似しているといえる。このほか、無文である点は異なるが、H-13区覆土で出土した折返し口縁壺〔47〕に似た胴部に屈曲を持つ小型の壺が第5層から出土している (Speiser 1933: Pl. LIV-7)。

(6) テル・フィスナ (Tell Fisna)

第Ⅴa層 (アッカド期) 出土土器がタヤⅨ、Ⅷ層出土土器群と類似するとの報告がある (沼本 1988: 17)。それらはストーンウェア¹⁰⁾ と呼ばれる精良な胎土の小型土器群、砂粒やスサ混和の比較的大型の土器群、刻文土器に大別されている。ここでは、刻文と黒色彩文の両方を併せ持つ口

縁部片 (沼本 1988: Fig. 24-192) や彩文を持つストーンウェア (沼本 1988: Fig. 25-220) が報告されている点は注目に値する。その色調や彩文を持つ個体が存在することから判断すると、報告者がストーンウェアと呼ぶ土器はいわゆる「タヤ土器 (Taya Ware)」¹¹⁾ に含まれると考えられる。その存在を考慮に入れると、少なくとも第Ⅴa層として報告されている土器の一部にはアッカド期以降に年代が下るのであろう。そのほか器形としては玉縁状口縁壺 (沼本 1988: Fig. 22-150) や屈曲浅鉢 (沼本 1988: Fig. 24-144) も類例がある。器形としては屈曲浅鉢に比べてやや深くなるが、強い屈曲部を持つ鉢はニネヴェⅤ期に良く見られる。

また、Ⅴa層と同時期 (すなわちアッカド期) と考えられる横穴式石室墓G2からはピーカー (沼本 1988: Fig. 43-26) や長頸壺 (沼本 1988: Fig. 42-16 ~ 21) が報告されている。これらの一部は赤色彩文の後磨研されている点でサラサート出土資料とは異なるが、その一方でサラサートとも共通する肩部を回る水平刻文の存在も認められる。

(7) テル・ジガン (Tell Jigan)

A区Ⅳb層 (アッカド期) が本稿で扱う時代に該当すると考えられる。「タヤ式ストーンウェア」¹²⁾ の存在が指摘されている (井・川又 1984-85: 158)。Ⅳb層は生活面が捉えられなかったということで報告されている遺物はわずかであるが、その中には屈曲浅鉢 (井・川又 1984-85: Fig. 8-91) が報告されている。

また、アッカド期と推定されている石室墓G1からはサラサートH-15区に特徴的な折返し口縁壺 (井・川又 1984-85: Fig. 10-140) のほか、刻文や櫛描文を持つ土器片 (井・川又 1984-85: 139・142) が報告されている。また同じくアッカド期と考えられうる石室墓G6からは長頸壺 (井・川又 1984-85: 146 ~ 155) が出土している。これらの一部はテル・フィスナ出土の長頸壺同様に赤色を彩色した後に磨研されている。

このほか、C区3a層・3b層 (前19世紀) 出土土器が本稿と関係する。ここからは最初期のハブール土器とされる一群の土器 (Oguchi 1997: Fig. 1-5, 2001: Fig. 8, 2003: Fig. 4-28) のほか、前3千年紀後半に年代づけられるの土器 (Oguchi 2003: Fig. 4-1 ~ 27) が報告されている。小口は前3千年紀の土器伝統が前20世紀にも継続し、そのような伝統をになう土器が最初期のハブール土器が出現し使われ始めたときにも、使用されていたのではないかと疑問を投げかけている。提示されている土器の中でサラサート出土土器との関係で特に注目されるのは、サラサートH-15区に見られる折返し口縁壺 (Oguchi 2003: Fig. 4-12) とGH13区に見られる波形櫛描文と水平帯状文の彩文を持つ土器〔50〕がここにも見られる (Oguchi 2003: Fig. 4-28)

ということである。

(8) テル・ハマド・アガ・アッ・サギール

(Tall Ḥamad Āga aṣ-Ṣağīr)

この遺跡では北拡張区第Ⅱ区第11層から15層、西拡張区第Ⅱ区3層(いずれも前3千年紀後半と考えられる)からタヤ土器が出土しているということだが(Spanos 1990: Tabelle I)、具体的な土器としては北拡張区15層の土器がわずかに図示されているに過ぎない。しかし、その中にはピーカー(Spanos 1990: Abb. 20-4)や玉縁状口縁壺と考えられる口縁部(Spanos 1990: Abb. 20-6)が含まれている。

もう一点重要なことは、この遺跡では北拡張区の11層でハブール土器とタヤ土器が混在するとされていることである。この点に関して小口はさらにテル・ハマド・アガ・アッ・サギール土器(Spanos 1990: Abb. 20-8, 9)を前3千年紀後半の土器グループに入ると認定し、西拡張区においても前3千年紀後半の土器とハブール土器が混在しているとされている(Oguchi 2003: 93)。タヤ土器やハマド・アッ・サギール土器のような前3千年紀後半の土器が前2千年紀にまで継続して用いられたかどうかを判断するには今後の類例を待つよりほかない。しかしながら、西拡張区2層と北拡張区11層は前20世紀後半以降に位置づけられる可能性があることを指摘しておきたい。

(9) テル・ブラク (Tell Brak)

ここまでは現イラク領内の遺跡を見てきたが、ここからは現シリア領ハブール川流域の遺跡に目を向けたい。まずはテル・ブラクである。テル・ブラクは近年報告書が刊行された(Oates et al. 2001)ことで土器に関して多くの情報を得られるようになった。M期(アッカド期:前2250~2150年)、N期(ポスト・アッカド期:前2150年~1950年)が対象となる時代である(年代は上記報告書による)。

ブラクM期、N期を通じて特徴的なのは櫛描文や刻文、刺突文などである。特にサラサートとの比較では、玉縁状口縁壺(Oates et al. 2001: Fig. 395-103; Fig. 414-493, 494, 512)が挙げられ、これもN期、M期を通じて出土している。

そのほか、M期として報告されているものとしては、肩に刻文を持つ長頸壺(Oates et al. 2001: Fig. 446-1300, 449-1369)が挙げられる。また、若干器形が異なるが、単純口縁の鉢〔30〕に類する丸底の鉢はM期に専ら現れる(Oates et al. 2001: Fig. 437-1085, Fig. 430)。

一方、N期として報告されているものとしては、まず折返し口縁壺(Oates et al. 2001: Fig. 403-292, 293, Fig. 414-513)が挙げられる。年代が分かるものはいずれもN期と

して報告されている。また、屈曲浅鉢(Oates et al. 2001: Fig. 418-601, 602)や、ピーカー(Oates et al. 2001: Fig. 422-734, 735)などもN期とされている。これらはテル・タヤではいずれもⅧ層からⅧ層にかけて(つまりアッカド期)に出土していたとされる土器であり、明らかにその年代に齟齬が生じている¹³⁾。サラサートで検出された突帯を持つ土器〔43〕と同一の器形と考えられる壺がN期として報告がある(Oates et al. 2001: Fig. 423)。また、器形は異なるが同じくN期には胴部に突帯を持つ壺が複数報告されている(Oates et al. 2001: Fig. 425)。ただし、少し遡ったニネヴェエV期からアッカド期にかけての鉢の胴部に突帯が施された出土例も存在する(Oates et al. 2001: Fig. 395-106)。

装飾に関しては上述の刻文などのほかに彩文も見られる。彩文は黒色の点列文が刻文などと共に施されている例(Oates et al. 2001: Fig. 403-294-297)のほか、内外面の大部分を暗赤色ないし褐色の彩文で彩色した鉢(Oates et al. 2001: Fig. 418-611, 627-629)、口縁部周辺の内外面に赤色彩文を施した壺(Oates et al. 2001: Fig. 401-261, 262)などが報告されている。これらのうち1点がM期であることを除き、他はいずれもN期とされている。

ところで、N期は上記のように前1950年までの幅を持っているが、これは前3千年紀的な土器の伝統が前2千年紀になっても継続することを意味している。実際、ブラクではSS1096というコンテキストから南メソポタミアのイシン・ラルサ期の土器が出土しており(Oates et al. 2001: 173-174)、前2千年紀初頭にも居住が行われたことが明らかとなっている。

(10) チャガル・バザル (Chagar Bazar)

1999年より再発掘が始まり、D区第Ⅱ期がポスト・アッカド期に相当すると概報で報告されていたが(McMahon et al. 2001)、土器についての十分な報告はなされていなかった。しかし、最近報告書が刊行された(Tunca et al. 2007)、その概要を知ることができるようになった。第Ⅱ期は上層Ⅱaと下層Ⅱbに分けられている。それぞれの絶対年代についての言及はないが、第Ⅱ期はポスト・アッカド期、あるいは前期青銅器時代Ⅳb期から中期青銅器時代¹⁴⁾にかけて、すなわち初期ジャジラ編年(以下EJ)でEJIV期末からEJV期にあたりとされる¹⁵⁾(Tunca 2007: 7)。

サラサートとの併行関係が認められる器形としては、H-15区で特徴的に見られた肩に刻文が周る折返し口縁壺がここではⅡb層床面から検出されている(McMahon and Quenet 2007: Pl. 3.34-161, 163, 164)。やや大型だが同じ器形で口縁部直下に黒色の点列文を持つものもⅡb層から検

掘が未完了であるため異なる発掘区出土の遺物の同時性を層位的に主張できず、2) H-13区ではハブール土器が、G/H-13区からはそれぞれ「浅い糸底」の底部片が検出されているからである。そこで、概報でテル・タヤIX-VI層（前3千年紀後半）併行であるとされた、主としてH-15区床面から出土した一群の土器、G-13区出土の土器、そしてハブール土器を含んだH-13区出土土器が同時代であると考えることが可能であるのかどうかという点を検討する必要がある。ハブール土器は一般には前19世紀以降に登場する土器であると考えられており、タヤIX-VI層とは最小でも100年以上の開きがある。この開きをどのように理解することが可能であるのかを検討する。そこで、上で述べた周辺各遺跡からの出土の有無を改めて整理しながら、各発掘区の建物の年代について考察する。

図10は非常に簡略化してはいるが、上述した各遺跡の出土事例に従っていくつかの特徴的な器形がどの時代から検出されているかをまとめたものである。ここではサラサート出土の各器形がどの年代幅の可能性を持っているかが簡潔に示されている。H-15区床面で特徴的なビーカー、折返し口縁壙、長頸壺に着目すると、アッカド期にその存続期間が重なり合うことに気がつく。また、ビーカーについてもテル・ブラクでポスト・アッカド期とされる出土例が存在するほかは全てアッカド期の範囲に収まっている。H-15区では床面から完形土器がまとめて床面から出土しており、それらは共伴する同時期の遺物と考えるべきである。従って、H-15区床面の遺物はアッカド期に属すると考えるのが妥当であると筆者は考える。

一方、H-15区覆土出土の土器を検討してみると、ビーカー、折返し口縁壙、屈曲浅鉢など床面とほぼ同時期と考えられる土器に混じって彩文と刻文を併せ持つ折返し口縁壙〔20〕が一点記録されている点も注目される。この器形は前3千年紀の器形である（ニネヴェに類似した器形が存在する：上述参照）が、彩文と刻文が施されており、最初期のハブール土器である可能性が強く示唆される。筆者はこれを最初期のハブール土器であると考えた。したがって、これは前2千年紀まで下る土器片だと考えられる¹⁷⁾。

では、G-13区で出土した土器はどの時代に位置付けることができるのであろうか。上述のように、H-15区とは様相を異にするのだが、単純口縁の鉢〔30〕や内折口縁浅鉢の存在のようにアッカド期に限って見られる土器が存在する。その一方で、前2千年紀に下ると考えられる、「浅い糸底」の底部片〔39・40〕が含まれることも注目される。

H-13区もまた覆土由来の土器である。これらの土器の時期についても検討してみたい。ここで注目されるのが、ハブール土器の存在である。これまでの研究によれば、ハ

ブール土器は通常は前1900年、どれほど遡っても前1950年がその上限年代と考えられている（Oguchi 1997: 198; Postgate et al. 1997: 53）。そして、これらH-13区で出土したハブール土器の少なくとも一部は上層（第II層）と同時期ではないと考えられる。なぜならば、ここで出土したハブール土器には最初期のハブールの特徴が見られるのだが、それらは第II層に帰属するとは考えられないからである¹⁸⁾。これまでに報告された最初期のハブール土器の特徴は大きく分けて2つある。1つは刻文や櫛描文と彩文の併用、もう1つは暗赤褐色ないし暗赤色の彩文である（Postgate et al. 1997: 53, Oguchi 2001: 脚註51, Oguchi 2003: Fig. 4-28¹⁹⁾）。サラサートH-13区出土のハブール土器の中には既に述べたように櫛描文・刻文と彩文の併用〔50〕のほか、彩文の色調にも暗赤褐色が見られる〔50・51〕。また、黒色の彩文を持つ口縁部片〔52〕はアッカド期以前より存在する点列文の色調がいずれも黒色であったことから、前3千年紀の伝統を受け継いだ、ひょっとすると最初期のハブール土器である可能性が指摘できる。大型の甕の口縁部〔49〕もタヤIV層との対応関係を考えると、最初期のハブール土器に属す可能性を持っている。加えて、胴部に屈曲を持つ折返し口縁壙〔47〕も類似した器形がテル・ピッラ第5層から出土していることは既に述べたとおりであり、前3千年紀の器形とハブール土器に特徴的な彩文の組合せと考えることが可能である。

次いで、H-13区出土のハブール土器以外の土器片の検討をしてみたい。これらには前3千年紀と前2千年紀の両方の土器が含まれている。単純口縁の鉢〔30〕と内折口縁浅鉢は周辺遺跡との比較からするとアッカドに限って見られる土器である。また、突帯を持つ土器片〔43〕は、前2千年紀のコンテキストからの類似出土例は存在するものの（Pulhan 2000: Fig. 28-779）、アッカド期からポスト・アッカド期の枠内に収まる可能性が高い。その一方で、「浅い糸底」〔46〕は前2千年紀に見られる特徴である。こうしたことから、この発掘区出土資料もG-13区と同様に少なくとも2つの時期の土器群を含んでいることになる。すなわち、アッカド期と前2千年紀初頭である。

さて、H-15区、G-13区、H-13区のいずれの発掘区においても覆土からは共通してアッカド期と前2千年紀初頭と考えられる土器が出土した。ただし、覆土の土器をそのまま建物の年代と考えるわけにはいかない。堆積の状況が不明であるために断定はできないが、これら覆土は第III層の建物が廃絶の後、第II層が構築される以前に堆積したか、あるいは第II層構築時に整地のために人為的に埋められた土のいずれか（ないし両方）によるものだと考えるのが、合理的であろう。では、G-13区とH-13区の建物の年代は判断できないのであろうか。ここであらためて注目すべき

点が存在する。それは、1) いずれの発掘区においても覆土から出土した土器はアッカド期と前2千年紀初頭という限られた時期を示す、2) H-13区では床面が検出されている、という点である。H-13区で検出された床面はH-15区の床面(筆者はアッカド期と考える: 上述参照)から約20cm低い高さで存在し、ほぼ同一面と捉えてよいと考えられる。建物と覆土出土土器の間になんらかの関連性が見出せるとすれば、前2千年紀初頭という年代を採用するのが妥当であろう。しかし、覆土と建物との関係が不明であり、少なくとも1区画の床面はアッカド期であることを考慮に入ると、H-13区の建物は(とおそらくG-13区の建物も)アッカド期に帰属させることが最も蓋然性が高い。これが正しいならば、サラサートI号丘第Ⅲ層の年代はアッカド期となり、第Ⅲ層と第Ⅱ層の居住時期の間に少なくとももう一時期、すなわち前2千年紀初頭にこの遺跡に居住があったことになる。

(2) 最初期のハブール土器

次に最初期のハブール土器について議論する。上述のように、サラサートでは最初期のハブール土器と考えられる土器が出土していたことが明らかとなった。これまでに報告されている最初期のハブール土器は極めて少なく²⁰⁾、かつそれらの出土の大部分は床面などの優良なコンテキストからではない。今後各遺跡での発掘調査が進展するにつれて出土事例は増えるであろう。しかし、ワイスが主張するような居住の断絶があったとは考えられないものの、この時期に居住が衰退したことはおそらく確かであろう。であれば、今後も大規模な出土事例は望めまい。そのため、10点〔20・47-55〕(この内少なくとも6点〔20・47・49・50-52〕は最初期である可能性が高い)まともって提示できたことは今後の比較材料としても重要であろう。波形の櫛描文と彩文との組合せの事例〔50〕はテル・ジガンに次いでこれがわずかに2例目である(ただし水平刻文/櫛描文と彩文の組合せはテル・アル・リマーやテル・タヤでも出土している)。とりわけこの組合せはハブール土器の起源を考える上で大きな意味を持つことが指摘されており(Oguchi 2001: 註51)、前3千年紀以来の在地の土器伝統の中からハブール土器が出現してきたことを示唆する。折返し口縁坑〔20〕もまた、前3千年紀の器形と水平帯文、刻文の組合せである。加えて、サラサートの資料を特に重要なものとしているのが、彩文・刻文の組合せの土器と混在したその他のハブール土器である。テル・ジガンでは前3千年紀の土器群と共に最初期のハブール土器が混在することが強調されているが、サラサートでは最初期のハブール土器と最初期以降としても遜色のないハブール土器が混在している。このサラサートでの出土事例は、最初

期のハブール土器から典型的なハブール土器への連続性を追うことができる可能性をあらためて示唆している(図11参照)。

サラサートの資料との比較の中で、現イラク領ばかりでなく、現シリア領のハブール川流域にも最初期のハブール土器の候補(テル・モザーンとチャガル・バザル: 上述参照)が存在することを確認した。しかしながら、その証拠は発掘が停滞しているはずのイラク側に多く、発掘が進展しているはずのシリア側の資料は上述のように最初期のハブール土器と認定できるか議論の余地がある。また、サラサートでも検出された波形櫛描文と彩文との組合せは現在のところイラク側の2遺跡のみで出土している(彩文と刻文の組合せということであれば、これらにテル・アル・リマーとテル・タヤが加わり、イラク側の4遺跡ということになる)。今後のハブール川流域での発掘の進展は慎重に見守る必要があるが、現状ではハブール土器の起源地はチグリス川とシンジャール山脈に挟まれた限られた地域にあったと想定したい誘惑にかられる。ただし、限られた地域にその起源があったかどうかに関わらず、ハブール土器出現の背景には前3千年紀半ば以来の北メソポタミアにおける彩文土器と刻文土器の伝統が存在した。ハブール土器の外部²¹⁾起源が主張されるとき、その主張の根拠となるのは突然に彩文土器が出現するというところにある(Gerstenblith 1983: 63; Mallowan 1937: 104, 1947: 23; Perkins 1954: 50; Porada 1965: 172など)。しかし、本稿でも確認したように、彩文自体は出土比率は少ないものの前3千年紀後半を通じて常に存在していた。また、同じく刻文/櫛描文土器も前3千年紀後半によく見られる土器である。最初期のハブール土器の検出例が未だ少ないながら、こうした彩文と刻文/櫛描文の伝統の中から自然にハブール土器が製作されるようになったと想定することも可能であろう。

最後にサラサートで検出された最初期のハブール土器のおおよその年代を推定しておく。小口はジガン出土の最初期のハブール土器を前19世紀としており(Oguchi 2003: 94)、ハブール土器が使われ始めた時期にも前3千年紀後半の土器の伝統をひく土器が使われ続けていた可能性を示唆している。サラサートの事例はより新しい時期の土器との混在であるととらえ、それよりも若干新しい年代と考えたい。また、タヤⅣ層とも併行する可能性を考慮に入れば、現状では前1850年頃を中心とした前後の時期と想定するのが妥当であろう。ただし、これは前1900年をハブール土器の上限年代とする一般的な年代観に従った結果である。今後の発掘の進展により前20世紀の状況がより明らかになることで変動する可能性があることを指摘しておきたい。

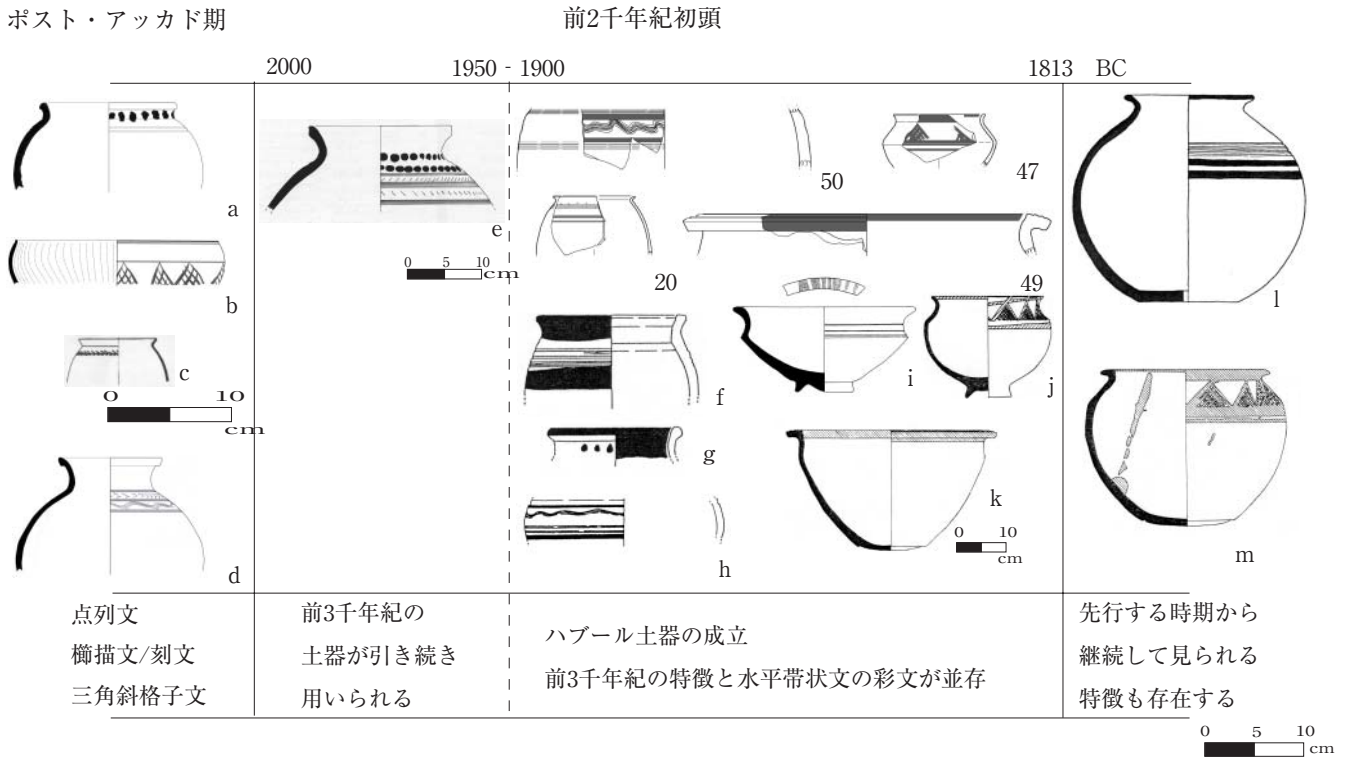


図 11 装飾の変遷から見たハブール土器の成立

縮尺 = c, e, k については各図の右下に付した縮尺を参照。その他については全体の右下に付した。
 a: Chagar Bazar (McMahon and Quenet 2006: Pl. 3.35-167), b: Chagar Bazar (McMahon and Quenet 2006: Pl. 3.59-254), c: Nineveh (McMahon 1998: Fig. 8-13), d: Chagar Bazar (McMahon and Quenet 2006: Pl. 3.40-185), e: Tell Brak (Oates et al. 2001: Fig. 404-309), f: Tell Jigan (Oguchi 2001: Fig. 8-1), g: Tell Jigan (Oguchi 2001: Fig. 8-4), h: Tell Jigan (Oguchi 2003: Fig. 4-28), i: Tell Taya (Reade 1968: Pl. LXXXVII-26), j: Tell al-Rimah (Postgate et al. 1997: Pl. 58-521), k: Tell Taya (Reade 1968: Pl. LXXXVII-28), l: Chagar Bazar (Mallowan 1936: Fig. 16-2), m: Tell Taya (Reade 1958: Pl. LXXXVII-29)

5. まとめと結論

本稿ではテル・サラサート I 号丘第Ⅲ層出土の土器を提示し、その年代的位置付けについて検討を加えた。その結果は、第Ⅲ層の土器が2時期、すなわちアッカド期と前2千年紀初頭に分かれるというものであった(図9ではそれぞれをⅢ層古、Ⅲ層新とした)。そして、第Ⅲ層の建物はいずれもアッカド期に属する可能性が高いことを示した。第Ⅲ層の位置付けに関しては、概報時にはタヤⅧ層との併行関係が主張されつつも、かなりの幅(アッカドからポスト・アッカド期)を持たされていた。しかし、その後進展した他遺跡の発掘成果と比較することで、ほぼアッカド期の範囲内に収まることが確認できた。また、前2千年紀初頭の土器については、概報時にはその存在が認識されていなかった。本稿は第Ⅲ層と第Ⅱ層の間に少なくとももう一時期この遺跡に居住があったことを指摘した。

仮に将来の発掘の進展により第Ⅲ層の年代的位置付けが

多少変わろうとも、サラサート出土資料の重要性が揺らぐわけではない。なぜならば、本稿が報告した資料の重要性は単に第Ⅲ層の土器が2時期に分かれることを示したことばかりではなく、最初期のハブール土器を提示したこと自体にも意義があるからである。最初期のハブール土器の出土例は僅少である。そうした中で、テル・サラサートの事例はテル・ジガーンの事例とともに、前3千年紀から前2千年紀への土器の流れを裏付ける貴重な証拠を提示していることを明らかにした。

おわりに

かつてハブール土器と命名したマロワンは、チャガル・バザル第1層と第2層との間に断絶を認めてハブール土器の外部起源を主張した(Mallowan 1937: 104, 1947: 23)。その後ハムリン(Hamlin 1971: 313)やスタイン(Stein 1984: 26)らによって在地起源が主張されることはあって

も、データ不足は否めなかった。しかし、徐々にではあるがようやく在地起源、それもかなり限られた地域に起源があった可能性を主張できるデータがそろい始めた。

ハブール土器が在地起源か否かという問題は単なる土器の問題には留まらない。一度崩壊したこの地域の都市社会がどのように復興を遂げるのかということとも関連する重要な問題である。ユーフラテス中流域以西と比べて北メソポタミアは未だ情報量が少なく、どのように都市が再生していくのか全体像が描かれるに至っていない。本稿では土器のみを扱ったが、少なくとも土器に関する限り、外部の影響で変化したという状況は認められない。むしろ在地の土器がそのまま前2千年紀の土器へと発展していったように見える。今後は土器に限らず幅広い資料を用いて前3千年紀末から前2千年紀にかけて物質文化が変化する過程を丁寧を追って行きたい。そうすることで都市社会がどのように復興するかが見えてくることだろう。

謝辞

東京大学イラン・イラク調査団および団員の方々に感謝申し上げたい。とりわけ、松谷敏雄先生には発掘当時の状況に関してお話を伺うことで多くの示唆を与えていただいた。また、本稿で提示した土器の実測および拓本は全て千代延惠正先生によるものである。指導教官である西秋良宏先生には平素より大変お世話になっており、本稿執筆についても多くの助言を賜った。筆者が現在サラサートI号丘の資料整理を行うことができるのは以上の方々のおかげである。加えて、査読者の方々には筆者の誤解を正していただき、また多くの有用な助言を賜った。ここに記して深い感謝の意を表したい。本稿を端緒として今後鋭意サラサートI号丘の整理・研究に取り組んで行く所存である。

註

- 1) 本文では中年代説 (Middle Chronology) に従った年代を用いる。なお、本稿で前2千年紀初頭という場合、それは前2000年から前1800年ごろまでのおよそ200年間を指す。「初頭」という言葉から一般に連想されるであろう期間よりも長い年代幅を持っていることを特に指摘しておく。同様に本稿で前3千年紀末という場合、およそ前2200年から前2000年ごろまでの期間を指す。
- 2) ただし、近年クーティは乾燥化の原因となった火山噴火ないし隕石の爆発が生じた時期を初期王朝期末/アッカド期初頭に位置づけ、乾燥化により急速に居住が廃絶したという従来の考えを改めるに至っている (Courty 2001)。
- 3) AS2期は土器の報告 (Postgate et al. 1997) ではAS1期とともにA5期 (前3千年紀末) というA地区での時期区分に統合されている。図9に遺跡の年代に関する図を添付したが、ここではA5になっている。
- 4) 本稿での「最初期のハブール土器」とはハブール土器が広く用いられるようになるシャムシ・アダド治世 (前1813-1781年) よりも前の時期のハブール土器という意味で用いる。これは小口のハブール土器第1期 (Oguchi 1997: 198, Fig. 1) に相当する。後述するように、一般に前1900年頃からの約90年ほどの間のどこかでハブール土器の使用が始まったと考えられている。この時期のハブール土器は出土事例が少なく、現状では土器に基づいて細分することはできない。本稿でこの時期と考える土器は、90年ほどの幅を持った時期のどこかに位置付けられる土器であり、それらが厳密な意味での同時期を示すわけではない。
- 5) 松谷敏雄先生より完形の土器が床面から検出され、確実に床面出土とされる場合以外は安全を期して覆土出土としたとの話を伺った。覆土から検出された土器の中にこのように完形品が含まれるのは、そのような発掘時の遺物の取り扱いによるものと考えられる。
- 6) サラサートの概報ではChannel Base (Reade 1968: 258) の訳として「浅い糸底」を挙げている (松谷・深井 1978: 註24)。本稿でもこれに従う。ヘラ状工具で外周部近くを削り出された底部を指す。テル・タヤでは、層以前には存在しないことが報告されており、編年に利用できる1つの指標となっている。
- 7) ここで提示しているH-13区出土の土器は、当時の発掘記録を参照するといずれも床面からではなくH-13区で検出された壁の内外を掘下げ中に出土した可能性が高い。
- 8) 土色帖による色調の記録は残されていない。ここで挙げた色調は実測者の肉眼観察によるものである。
- 9) 当初の概報ではⅧ層からⅦ層は南メソポタミアでのグティ人侵入時期と考えられていたが (Reade 1968: 260-261, 1971: 99-100, 1973: 168)、1982年の時点では変更されている。
- 10) ストーン・ウェア (Stone Ware) という用語は研究者によって定義が異なっており注意が必要である。例えば、テル・ブラクの報告では2つの異なる土器群がストーン・ウェアに含まれている。1つは非石灰質で灰色から赤色を呈する土器で、もう1つは石灰質で淡いオリーブ色から淡い灰色を呈する。ただし、必ずしも色調では区別できない場合もあり、厳密に区別するには化学分析が必要だとされる。このことが両者をともにストーン・ウェアと呼ぶ第1の理由として挙げられている (Oates 2001: 153)。その一方で前者をメタリック・ウェア (Metallic Ware)、後者をストーン・ウェア (ブラク・タイプ) と呼び分ける研究者もいる (例えばPurβ 2000)。なお、ここで報告者がストーン・ウェアと呼ぶ土器は上記のストーン・ウェアとはまた別の、いわゆるタヤ土器 (Taya Ware) であると考えられる (註11) 参照)。
- 11) タヤ土器とは緑色の緻密な胎土を持つ土器で、鉢にはしばしばパターン・パーニッシュが施される。また、彩文が施されることもある。年代としては確実にポスト・アッカド期に位置付けられる (Oates 2001: 171)。
- 12) 出土土器についての記載に「淡緑色を呈するストーン・ウェア」 (井・川又 1984-85: 166) とあることから、タヤ土器 (註11) 参照) のことを指すと考えられる。
- 13) ただし、註9) で述べた当初の年代を採用するのであれば、齟齬は生じないことになる。
- 14) 青銅器時代編年はシリアでは伝統的に用いられている編年体系であり、前期青銅器時代はI・II・III・IV a・IV b期に細分される。中年代説に従えば、前期青銅器時代IV b期は前2170年から前2000年に中期青銅器時代は前2000年から前1595年にわたる (Anastasio et al. 2004: Figs 7, 8)。報告者はD区第II期が前2千年紀初頭まで続いた可能性を示唆している (Tunca 2007: 7)。
- 15) 初期ジャジラ編年は現シリア北東部のいくつかの遺跡の土器を基にした編年体系である。ルポー (Lebeau 2000) やプフェルツナー (Pfälzner and Dohmann-Pfälzner 2001) らによって編年の精緻化が進められている。この編年体系では、前3千年紀が0・I・II・III a・III b・IV・Vの7期に細分される。ルポーの編年に従えばIV期はおよそ前2325-2275年から前2200-2150年、V期はおよそ前2200-2150年から前2000年 (いずれも中年代説に従った年代) に相当する。

- 16) しかしながら、言及されている土器は三角斜格子文の彩文を持つとされることから、おそらく報告者が意図している土器は Spanos 1992: Abb. 20-3 であろう。だとするならば、ハマド・アッ・サギール土器ではなく、タヤ土器であろう。
- 17) 本稿での周辺遺跡との比較の項で提示した類例からも明らかのように、現在までのところ、本稿で論じた地域の範囲では前3千年紀末に水平帯状文の出土例は実質的に存在しない。そのため、水平帯状文の彩文の出現が最初期ハブール土器が成立した時期に属すると考えるのが妥当であろう。また、この塊〔20〕の器形が前3千年紀後半の当該地域の土器によく見られる折返し口縁塊であり、明らかに在地の土器である。前3千年紀の西アジアのほかの地域では水平帯状文を持つ土器群が存在するが、この塊〔20〕がそうした外部起源であることは想定しにくい。
- 18) 第Ⅱ層出土土器については現在整理中ということもあり詳細な年代についての断定は避けたいが、少なくともハブール土器の最初期まで遡ることは無く、おそらく前18世紀以降であろうと現在のところ考えている。Ⅱ層の年代的な位置付けについてはまた別稿にて論じる予定である。
- 19) これらに加えて、砂粒混和も一つの特徴として加えられるかもしれない。出土事例が複数になることを待ちたいが、チャガル・バザルでの出土事例 (McMahon and Quenet 2007: Pl. 3.31-145) は最初期のハブール土器である可能性がある。ただし、報告者が指摘するほど (McMahon and Quenet 2007: 97) 砂粒混和土器は前2千年紀の土器の中で特異な存在ではない。テル・ブラクでは砂粒混和の胎土であるタイプ W2 はハブール土器の中にも散見される (例えば Oates et al. 2001: Fig. 193)。このため、現状では最初期ではなく攪乱による混入なども考慮に入れる必要があろう。
- 20) テル・アル・リマーで計1200点あまりの土器が図示されながら、わずか6点 (Postgate et al. 1997: No. 520, 521, 558, 559, 621, 875)、テル・ジガンで9点 (Oguchi 1997: Fig.3-5; 2001: Fig. 8; 2003: Fig. 4-28) が報告されている。これに加えて、本稿でも述べたテル・フィスナの1点 (沼本 1988: Fig. 24-192)、チャガル・バザルの1点 (McMahon and Quenet 2007: Pl. 3.31-145)、テル・モザーンの2点 (Buccellati and Kelly-Buccellati 1988: Fig. 26-M1 83, M1 84) が可能性のある資料として挙げられる。また、チャガル・バザル出土資料に関してはスタインが4点を形態的にハブール土器と先行する時期の刻文土器との移行的な土器として挙げている (Mallowan 1936: Fig. 16-2, 3, 1937: Fig. 22-11, Fig. 24-6; Stein 1984: 22)。ただし年代的には本稿でいう最初期には入らないと考えられる。テル・タヤⅣ層出土土器は年代から判断して最初期のハブール土器に含めるべきである。しかしながら、彩文と刻文の組合せが存在するとのことだが、残念ながら未報告となっている。報告で図示されているⅣ層出土土器はいずれも (とは言ってもわずか3点であるが) 形態的に最初期以降にも存続する土器であると考えられる。スタインはチャガル・バザル、テル・アル・リマー、テル・タヤ以外にテル・ピッラにも移行的なハブール土器存在することを示唆している (Stein 1984: 22)。しかし、その参照箇所 (Speiser 1933: 254, 257) の2つの事例も最初期のハブール土器とは認定しがたい。前者は本稿でも度々言及した点列土器でありアッカド期以前より存在する。また、後者は層位的に古い可能性があるということだが、報告されている層位はニネヴェⅤ期にまで遡ることになる。ただし、その土器のうち脚付の鉢 (Speiser 1933: Plate LIX-3) は器形から判断すると上記テル・アル・リマーの資料 (Postgate et al. 1997: No. 521) に類似しており、最初期である可能性が全く無いとは断定できない。

- 21) 本稿で述べる外部とは小口のハブール土器第2期の主要分布域 (図1; Oguchi 1997: 206) の範囲を内部にとらえ、その外側に対して用いている。後述する在地起源の在地とはこの主要分布域内のことを指す。

参考文献

- Anastasio, S., Lebeau, M. and Sauvage, M. 2004 *Atlas of Preclassical Upper Mesopotamia*. Subartu 13. Turnhout, Brepols.
- Buccellati, G. and M. Kelly-Buccellati 1988 *Mozan I: The Soundings of the First Two Seasons*. Bibliotheca Mesopotamica Vol. 20. Malibu, Undena Publications.
- Buccellati, G. and M. Kelly-Buccellati 2001 Überlegungen zur funktionellen und historischen Bestimmung des Königspalastes AP in Urkesch, Bericht über die 13. Kampagne in Tall Mozan/Urkeš: Ausgrabungen im Gebiet AA, Juni-August 2000. *Mitteilungen der Deutschen Orient-Gesellschaft zu Berlin* 133: 59-96.
- Cooper, L. 2006 The Demise and Regeneration of Bronze Age Urban Centers in the Euphrates Valley of Syria. In G. M. Schwartz and J. J. Nichols (eds.), *After Collapse: The Regeneration of Complex Societies*, 18-37. Tucson, The University of Arizona Press.
- Courty, M.-A. and H. Weiss 1997 The Scenario of Environmental Degradation in the Tell Leilan Region, NE Syria, During the Late Third Millennium Abrupt Climate Change. In H. N. Dalfes et al. (eds.), *Third Millennium BC Climate Change and Old World Collapse*, 107-147. Berlin, Springer-Verlag.
- Courty, M.-A. 2001 Evidence at Tell Brak for the Late EDIII/Early Akkadian Air Blast Event (4 kyr BP). In D. Oates et al., *Excavations at Tell Brak, Vol. 2: Nagar in the third millennium BC*, 367-372. London, British School of Archaeology in Iraq.
- Dalfes, H. N., G. Kukla, and H. Weiss (eds.) 1997 *Third Millennium BC Climate Change and Old World Collapse*. Berlin, Springer-Verlag.
- Egami, N. 1958 *Telul eth Thalathat Vol. I: Excavations of Tell II*. Tokyo, Tokyo University Press.
- Faibre, X. 1992 La Céramique de Mohammed Diyab, 1990-1991. In J.-M. Durand, *Recherches en Haute Mésopotamie: Tell Mohammed Diyab: Campagnes 1990 et 1991*. Mémoires de N.A.B.U. 2, 55-90. Paris, Société pour l'Etude du Proch-Orient Ancien.
- Fukai, S. and T. Matsutani 1977 Excavations at Telul eth-Thalathat 1976. *Sumer* 33: 48-64.
- Gerstenblith, P. 1983 *The Levant at the Beginning of the Middle Bronze Age*. American Schools of Oriental Research Dissertation Series 5. Philadelphia, American Schools of Oriental Research.
- Hamlin, C. 1971 *The Habur Ware Ceramic Assemblage of Northern Mesopotamia: An Analysis of Its Distribution*. Unpublished Ph. D dissertation, University of Pennsylvania.
- Kelly-Buccellati, M. 1988 6. Artifacts from the Excavations. In G. Buccellati and M. Kelly-Buccellati, *Mozan I: The Soundings of the First Two Seasons*. Bibliotheca Mesopotamica Vol. 20. 65-81. Malibu, Undena Publications.
- Lebeau, M. 2000 Stratified Archaeological Evidence and Compared Periodizations in the Syrian Jezirah during the Third Millennium B.C.. In C. Marro and H. Hauptmann (eds.), *Chronologies des pays du Caucase et d l'Euphrate aux IVe-IIIe millénaires*. Varia Anatolica 11, 167-192. Paris, Institut Français d'Etudes Anatoliennes d'Istanbul.
- Mallowan, M. E. L. 1936 The Excavations at Tall Chagar Bazar and an Archaeological Survey of the Habur Region, 1934-5. *Iraq* III: 1-86.
- Mallowan, M. E. L. 1937 The Excavations at Tall Chagar Bazar and an

- Archaeological Survey of the Habur Region, Second Campaign, 1936. *Iraq* IV: 91-177.
- Mallowan, M. E. L. 1947 Excavations at Brak and Chagar Bazar. *Iraq* IX: 1-259.
- McMahon, A. 1998 The Kuyunjik Gully Sounding, Nineveh, 1989 & 1990 Seasons. *Al-Rāfidān* vol. XIX: 1-32.
- McMahon, A. and P. Quenet 2007 3. A late Third Millennium BC Pottery Assemblage from Chagar Bazar (Area D, Phase II). In Tunca et al. (ed.), 69-242.
- Nichols, J. J. and J. A. Weber 2006 Amorites, Onagers, and Social Reorganization in Middle Bronze Age Syria. In G. M. Schwartz and J. J. Nichols (eds.), *After Collapse: The Regeneration of Complex Societies*, 18-37. Tucson, The University of Arizona Press.
- Oates, D. 1970 The Excavations at Tell Al Rimah, 1968. *Iraq* XXXII: 1-26.
- Oates, D. and J. Oates 2001 Chapter 16, Archaeological Reconstruction and Historical Commentary. In D. Oates et al., 379-396.
- Oates, D., J. Oates and H. McDonald 1997 *Excavations at Tell Brak, Vol. 1: The Mitanni and Old Babylonian periods*. London, British School of Archaeology in Iraq.
- Oates, D., J. Oates and H. McDonald 2001 *Excavations at Tell Brak, Vol. 2: Nagar in the third millennium BC*. London, British School of Archaeology in Iraq.
- Oates, J. 2001 Chapter 5, The Third-millennium Pottery. In D. Oates et al., 151-194.
- Oguchi, H. 1997 A Reassessment of the Distribution of Khabur Ware: An Approach from an Aspect of its Main Phase. *Al-Rāfidān* vol. XVIII: 195-224.
- Oguchi, H. 2001 The Origins of Khabur Ware: A tentative Note. *Al-Rāfidān* vol. XXII: 71-87.
- Oguchi, H. 2003 20th Century B.C. North Mesopotamia: An Archaeological Dilemma. *Al-Rāfidān* vol. XXIV: 83-100.
- Orthmann, W. and A. Pruß 1995 Der Palast F. In W. Orthmann, R. Hempelmann, H. Klein, C. Kühne, M. Novak, A. Pruß, E. Vila, H.-M. Weicken, and A. Wener, *Ausgrabungen in Tell Chuēra in Nordost-Syrien I: Vorbericht über die Grabungskampagnen 1986 bis 1992*, 121-172. Saarbrücken, Saarbrücker Druckerei und Verlag.
- Perkins, A. L. 1954 The Relative Chronology of Mesopotamia. In R. W. Ehrich (ed.), *Relative Chronologies in Old World Archaeology*, 42-55. Chicago, The University of Chicago Press.
- Pfälzner, P. and H. Dohmann- Pfälzner 2001 Ausgrabungen der Deutschen Orient-Gesellschaft in der zentralen Oberstadt von Tall Mozan/Urkeš, Bericht über die in Kooperation mit dem IIMAS durchgeführte Kampagne 2000. *Mitteilungen der Deutschen Orient-Gesellschaft zu Berlin* 133: 97-139.
- Pfälzner, P. and H. Dohmann- Pfälzner 2002 Ausgrabungen der Deutschen Orient-Gesellschaft in der zentralen Oberstadt von Tall Mozan/Urkeš, Bericht über die in Kooperation mit dem IIMAS durchgeführte Kampagne 2001. *Mitteilungen der Deutschen Orient-Gesellschaft zu Berlin* 134: 149-192.
- Porada, E. 1965 The Relative Chronology of Mesopotamia. Part I. Seals and Trade (6000-1600 B.C.). In R. W. Ehrich (ed.), *Chronologies in Old World Archaeology*, 133-200. Chicago, The University of Chicago Press.
- Porada, E., D. P. Hansen and S. Dunham 1992 The Chronology of Mesopotamia, ca. 7000-1600 B.C.. In R.W. Ehrich (ed.), *Chronologies in Old World Archaeology*, 77-121 (Vol. I), 90-124 (Vol. II). Chicago, University of Chicago Press.
- Postgate, C., D. Oates and J. Oates 1997 *The Excavations at Tell al-Rimah: The Pottery*, Iraq Archaeological Report -4. London, British Archaeology in Iraq.
- Purß, A. 2000 The Metallic Ware of Upper Mesopotamia: Definition, Chronology, and Distribution. In Marro, C. and H. Hauptmann (eds.), *Chronologies des pays du Caucase et d l'Euphrate aux IVe-IIIe millénaires*. Varia Anatolica 11, 193-203. Paris, Institut Français d'Etudes Anatoliennes d'Istanbul.
- Pulhan, G. 2000 *On the Eve of the Dark Age: Qarni-Lim's Palace at Tell Leilan*. Unpublished Ph. D dissertation, Yale University.
- Reade, J. E. 1968 Tell Taya (1967): Summary Report. *Iraq* XXX: 234-264.
- Reade, J. E. 1973 Tell Taya (1972-73): Summary Report. *Iraq* XXXV: 155-187.
- Reade, J. E. 1982 Tell Taya. In J. Curtis (ed.), *Fifty Years of Mesopotamian Discovery: The Work of the British School of Archaeology in Iraq: 1932-1982*, 72-78. London, The British School of Archaeology in Iraq.
- Spanos, P. Z. 1990 Ausgrabungen in Tall Ḥamad Āḡa aṣ-Ṣaḡīr 1988. *Mitteilungen der Deutschen Orient-Gesellschaft zu Berlin* 122: 89-124.
- Speiser, E. A. 1933 Pottery of Tell Billa. *The Museum Journal* 23: 249-283.
- Speiser, E. A. 1935 *Excavations at Tepe Gawra: Volume I: Levels I-VIII*. Philadelphia, University of Pennsylvania Press.
- Stein, D. L. 1984 Khabur Ware and Nuzi Ware: Their Origin, Relationship, and Significance. *Monographic Journals of the Near East, Assur* 4/1: 1-65.
- Tunca, Ö 2007 1. Chantier D. Introduction et généralités. In Tunca et al. (eds), 1-10.
- Tunca, Ö, A. McMahon and A.-M. Bagdoo 2001 New Excavations at Chagar Bazar, 1999-2000. *Iraq* LXIII: 201-222.
- Tunca, Ö, A. McMahon and A.-M. Bagdoo (eds.) 2007 *Chagar Bazar (Syrie) II: Le vestiges <<post-akkadiens>> du chantier D et études diverses*. Publications de la Mission archéologique de l'Université de Liège en Syrie. Louvain, Peeters.
- Thompson, R. C. and M. Mallowan 1933 The British Museum Excavations at Nineveh, 1931-32. *Liverpool Annals of Art and Archaeology* 20: 71-186.
- Weiss, H., M.-A. Courty, W. Wetterstrom, F. Guichard, L. Senior, R. Meadow and A. Curnow 1993 The Genesis and Collapse of Third Millennium North Mesopotamian Civilization. *Science* 261: 995-1005.
- Wilkinson, T. 1997 Environmental Fluctuations, Agricultural Production and Collapse: A View from Bronze Age Upper Mesopotamia. In H. N. Dalfes et al. (eds.), 67-106. Berlin, Springer-Verlag.
- 井博幸・川又正智 1984-1985 「テル・ジガーン第一次発掘調査報告」『ラーフィダーン』第V-VI巻 151-214頁。
- 東京大学イラン・イラク学術調査室 1980 『イラン・イラク学術調査の歩み』
- 沼本宏俊 1988 「テル・フィスナ遺跡の発掘調査」『ラーフィダーン』第IX巻 1-72頁。
- 松谷敏雄・深井晋司 1978 「テル・サラサート遺跡の発掘——一九七六年——」『東洋文化研究所紀要』第74号 31-83頁。

木内 智康
東京大学大学院人文社会系研究科博士課程
Tomoyasu KIUCHI
University of Tokyo